

# エデュコ **Educo**

地球時代の教育情報誌

No.29  
2012年秋

巻頭インタビュー p.2

作家・演出家

鴻上 尚史さん

知っておきたい教育 NOW p.4

言葉の力が未来を創る  
子どもたちの思考力・判断力・表現力を  
育てるために

きょういく見聞録 p.8

学ぶ機会を失わせないために  
～子どもの困難に寄り添った支援教具の工夫～

地球となかよしトピックス p.10

「ふるさと松山学」  
歴史と文学の街・松山～郷土との絆を深める

インフォメーション 北から南から p.12

地球となかよしゼミナル p.14

コラム いまどきコドモ事情 p.15

ほっとな出会い p.16

NPO法人 フローレンス  
代表理事

駒崎 弘樹さん

# 想定したねらいに向かうだけでなく 過程を楽しむことに意味がある。

作家・演出家

こう かみ しょう じ  
**鴻上 尚史**さん



## PROFILE

1958年愛媛県出身。県立新居浜西高校，早稲田大学法学部卒業。1981年に劇団「第三舞台」を結成。「スナフキンの手紙」で岸田國士戯曲賞を受賞。2008年には「虚構の劇団」を旗揚げした。著書に『あなたの魅力を演出するちょっとしたヒント』（講談社文庫），『「空気」と「世間」』（講談社現代新書）。現在，桐朋学園芸術短期大学教授を務める。

学校でも「伝える力」が重視されています。「伝える力」をどのように身につけていけるでしょうか。

「世間」に向けて伝える言葉と、「社会」に向けて伝える言葉は違います。日本では、これがいままのまま「伝える力が大事」と言っていますね。欧米的なディベートの能力や、人前で何かを発表する能力というのは、「社会」に向けて伝える力です。日本人は、大人でも、身内である「世間」に向けては、いくらでも根回ししたりしゃべったりするけれど、まだ利害関係を構築していない人たち、つまり「社会」に対してとまどっている。これからは、「世間」ではなく、「社会」とのコミュニケーションをどうとっていくかを課題にしていかなければいけない。

言葉をどう使い、伝える力を育てるか。教育出版の中学国語の教科書にも書きましたが（※1）、「三つの輪の言葉」を使い分けると、コミュニケーションの風景が変わるはずですよ。「他に関心が向いていない一人の状況」が「第一の輪」。「あなたも一人がいる、相手だけに関心をもっている状態」が「第二の輪」。「第三の輪」は、「関心が全体に向いて

いる、みんなという状態」。それぞれの輪に対応する言葉は、「ひとり言」「相手と話す言葉」「みんなと話す言葉」です。自分が話している言葉が、どの輪に当てはまるのか、いま自分の置かれた輪の状況と、話している言葉が合っているのかを意識すると、ずいぶん「伝える力」が変化してくると思います。

子どもが、学校の発表会やアナウンスで、棒読みになりがちなのは、第一の輪、つまり、ひとり言にとどまっているからです。第二、第三の輪を意識して話すと、全く違った話し方になるはずです。授業の中でぜひ活用してほしいですね。

実は、先生にこそ、「輪」は意識してほしいことなんです。今、私はすばらしい授業をやっている気持ちになっっているけれど、これは第一の輪だ、と気づくとか、今、私はすごく親しそうに生徒に話しかけているけれども、これは第三の輪でしゃべっている、とか。本来のコミュニケーションをするためには、一対一、つまり第二の輪でしゃべらないといけない、などということを実感していくことが、とても大切だと思うんです。

※1 教育出版 中学国語2年「言葉の達人になろう」

二〇〇六年に朝日新聞に掲載された、**鴻上さんの「いじめられている君へ」**が、いま、再び読まれています。

「死なないで、逃げて逃げて」。いじめられて死ぬほどつらい思いをしている子どもにまずしてほしいのは、学校から逃げることで、世界は思っているより広い、安心して生きられる場所はきつとある、と。(※2)

二〇〇六年にこれを書いたときは、立ち向かえ、がんばれ、という励ましが主流でしたから、こういうことを言う大人がいるからだめになるんだとか、戦わないでどうするんだとか言われたこともありませう。でも、戦えるなら苦しめないわけで、戦うことのできない現場だって本当にたくさんある。

大人だつてつらいことがあるれば逃げるんだから、子どもだけ逃げちゃいけないって変でしょう。大人には、精神的につらくなったり、体を壊したりしたときに、何でもつと早く逃げなかつたのとか、追い込まれる前に休めばいいじゃないと言いますよね。だから、子どもたちだつて逃げていいんだよと。僕はそれがあたりまえだと思っています。

今も「逃げて」という思いは変わ

りません。ただ、新聞に載っているかぎりでは、大人たちの間で読ませたいと思っただけにとどまってしまうのではないかと。肝腎の、追いつかれて、自分がどうしていいかわからない小学生や中学生にはまず届いていないのではないかと。いろいろな人が書いた、届けたい言葉がたくさんある。僕はそれらを、子どもたちが必ず目にする教科書にも、ぜひ載せてほしいと考えているんです。

**鴻上さんのワークショップには、学校の先生たちも参加されることが多いそうですね。**

表現力を身につけるために、子どものワークショップをしてくれとよく言われるんですが、先生が参加したほうが早いですよ(笑)。「こんな言い方ができるんだ」とか「こんな声の使い方があるんだ」とか「こういう動きで表現するのは楽しいじゃないか」と、まずは先生たちが、自分の声と体を使って表現することが楽しいと感じてほしい。それはまちがいないく子どもたちに伝わるんですよ。

僕のワークショップに出てくれる先生は、まじめな先生が多くて、とても熱心に取り組んでいます。ワー

クショップというのは、参加者をあつめた決まった結論に導いていくものではないんです。そのときの雰囲気と参加者とのやり取りによって、当初の想定とは全然違うところにたどりつくかもしれない。でも、その過程こそが大切なんです。しかし、まじめな先生は、ワークショップをやっているうちに、とにかく想定したねらいに向かわないと、その時間は失敗だったと思いがちです。だけど、本来の学問とはいったい何か。それは、結論の知識を吸収することではなくて、考え方を理解することだし、その過程にこそ教育の意味があると思う。

話題になつたPISA型の考え方というの、どう難問に対してアプローチするかという途中経過がいちばん大事なんですね。先生がまじめに結果を追求しすぎることが、子どもの成長を妨げるかもしれない。

テレビ番組も、まじめなディレクターは、番組を作り始める前から、どういうねらいで、どういう展開にするのかを練り込む。でも、ドキュメンタリー番組だと、どんな人と出会うか、そこでどんなできごとが起こるかなんてわからない。でも、ディレクターは頭の中に流れが全部でき

ていて、そこに向かつて進んでいく以外は認めなくなってしまう。本当に有能なディレクターは、たつぷりの準備はするんだけど、想定外に起こったことに対して、臨機応変にやる。準備もなく臨機応変しかやらないのはやる気がないということですが(笑)、たつぷりの準備をしながら、ただねらつた結果に突き進むだけではなく、ある意味いいかげんに過程を楽しむ、こうできればすばらしいと思うんです。

授業って、いわば先生の発表の場所だから、事前準備の時間は山ほど必要です。ただ、今の先生たちは、本当に忙しそう、頭が下がります。僕は、先生に時間を与えてあげたい。休みが十分にあることは少しも悪いことではない。それこそ、僕がやっているワークショップ、表現のレッスンなんかにも、時間があれば参加してみようという気もわいてくるわけ、忙しすぎると全くそんな気力もなくなってしまう、本当にもつたない。

保護者や行政に見えない事前準備も、たくさんあるはず。もつと先生に自由な時間を、というのがいちばん言いたいことですね。🍌

# 言葉の力が未来を創る



京都市立下京中学校  
校長 村上 幸一

## 変わる授業風景——平面から立体へ

世界トップレベルといわれてきた、日本の教育水準を支えてきた学校の授業の在り方が、この数年でずいぶん変わってきている。学習指導要領はじめ、国の指針による成果ではある。少し前までの授業風景といえば、教師と生徒との、1対40の点をつないだ一次的な空間が主であった。せいぜい点と点を少しつないだ、面的な二次元空間がたまに見られる程度だったのではないか。よい授業とは、整然と生徒が教師に向かい、教師の説明や範読に耳を傾け、板書を丁寧にノートに写し取り、ひたすら反復し、知識を獲得していく。教師が主役で、生徒は受け手という関係であった。それはそれで学びの基礎として大切なことで、変わらぬ不易の部分ではある。

しかしそこに、子どもが支配する言葉の存在は、極めて希薄であったように思う。教師や仲間に関わったり、自分の考えを述べ、

論理的に正しい批判を交わし合ったりなどは、ほとんど見かけなかった。特に初等教育においては、知識や技能の修得として「教えること」に重きを置き、「考えさせる」という視点は、教師自体にもその意識が乏しかったのではないか。しかし、ここにいたって、現場に身を置くものの直感として、ずいぶんと教師の意識が変わってきたように思う。学習の目当てが、定量的な結果のみでなく、子どもを主役に据えた、さまざまな「可能性」の追究という、ふくらみを持った立体的なものに変わりつつある。

## 学びと言葉の基本的な考え方

変化の著しい現代社会においては、対応能力や、答えが一つではない課題に果敢に向き合う姿勢、また、論理的に思考を組み立てていく力が重要になってくる。OECD（経済協力開発機構）のPIISA（生徒の学習到達度調査）をはじめ、いくつかの調査結果から、

日本の子どもたちの学力に疑問符がつきだして10年近くなる。特に、読解力や学習意欲の不足が指摘され、学力の水準とあわせて、学びの質の構造的な改善が求められてきた。前学習指導要領下においても、先行的に研究・実践を積み上げ、さまざまな授業法の改善を進めてきた学校が全国に数多くある。

今年度より、中学校は、新学習指導要領に完全移行した。「生きる力」という理念は引き継がれながら、特に「思考力・判断力・表現力」の育成について強く求められている。

新学習指導要領の基本的な考え方として、学校教育法第30条の第2項及び中教審平成20年答申において、次の3点が学力の重要な要素として示されている。

- ① 基礎的・基本的な知識・技能
- ② 知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等
- ③ 主体的に学習に取り組む態度

あわせて、重要事項の第1に、各教科等を貫く重要な改善点として、「言語活動の充実」を挙げている。それらの要素を各校の教育課程上にどのように位置付け、学習過程の中でどのように具体化していくのが問われている。以下、本校の取り組み例を挙げてみる。

## 校内研究により方向性を確かめる

本校では、思考力・判断力・表現力等をはぐくむ観点から、「言語活動の工夫」につい

て研究を進めてきている。単に定量化された知識の量を目指すのではなく、広く言語環境をどう整えるのかという視点で進めてきた。また、校内研究においては、関連性や継続性を大切にしながら、単年度ごとに研究テーマの見直しを図り研究を進めている。

平成23年度は、「思考力・判断力・表現力をはぐくむ学習過程の研究」『問う力』を鍛える言語活動の工夫』（※文部科学省指定）をテーマとした。今年度は、「志を見つめる学びの旅『キャリア教育の視点を持った教育活動の構築』」自分・相手・社会に問い、生き方を探究する」（※京都市教育委員会指定）として、自校のよりよい方向性を模索しながら経営を進めている。

### 言語環境を整える（具体事例）

本校では、教職員のワークショップ型研修を重ね、各教科領域に横断した「言語活動の工夫」について研究を深めている。また、総合的な学習の時間をコアにした指導法や教材の開発を、他校種連携により進めている。その仕掛けの中からいくつかを挙げる。

#### ○論理的思考力の育成

高校との連携により、「ポスターセッション」を行っている。個人またはグループでテーマを設定し、ポスター形式によってプレゼンテーションを行う。仮説の設定や根拠の説明等に加え、対話型のやりとりをしていく中で、論理的思考力や表現能力を高めることをね

らっている。

また、「宇宙船舶WS」として、大学等との連携による開発教材を使用している。「危機に瀕した地球から脱出する」とを想定し、どのような生物を箱船（ノアの方舟に模したキットを使用）に乗せるのか」をワークショップ形式（WS）で話し合い、その根拠や課題対応について発表し合う。

#### ○思考の幅を広げる

「人から学ぶ」というテーマで、ゲストの方のお話から、生命倫理や、生き方そのものを学習する。宇宙飛行士・山崎直子氏や、京都大学iPS細胞研究所長・山中伸弥氏にお越しいただき、直接、質問を行う・感じたことを述べるなど、ハイステージでの感覚を養う。今年度も、最先端で活躍中の、3名の方の来校を予定している。

#### ○感性や情緒面及び統合した力の育成

総合的な学習の時間を「新・京都学」と称し、「志 さらめく京都人として豊かに生きる」ことを目指して、京都の歴史・伝統・革新性から学び、体験型・探究型学習活動を進めている。祇園祭の鉦町を擁する地域に存在している本校では、1年に一度、「ゆかた登校」の日を設定して、700人ほどの生徒・教職員の全員がゆかたで登校し、一日を過ご



す。また、学年全体で行う「お茶会」での作法や、おもてなし、しつらい、についての体験を通じて、感性や情緒面をはぐくむ。

2年生においては、地域の事業所の方々の支援により、5日間の職場体験学習を行っている。職業観の育成や社会的自立に向けたキャリア教育の視点のもと、事前事後の調べ学習や結果考察、体験中の課題や新たな発見などをポートフォリオとして記録していくなど、働くという直接体験から、統合した思考力や判断力、行動力・表現力を培っている。

### 志を見つめる学びの旅

すさまじい変化をし続ける、知識基盤社会といわれる現代社会と、グローバルゼーションの波の中、近未来を生き抜いていく子どもたちにとって、「生涯にわたって学び続ける力」とは何だろうか。起こりうる問題のすべてを予測し、回避することが困難であることは、すでに実感としてあるだろう。

よりよい未来の実現のために、一見多岐にわたる学校の取り組みが、一人の子どもの中に「生きる力」として収斂されていき、未来づくりのエネルギーになっていくことを心から願う。



# 子どもたちの 思考力・判断力・表現力を 育てるために



東京都千代田区立昌平小学校  
教諭 寺田 美弥

## 話すことが好きな児童に

「なんて言ったらいいのかわからない。」自分の考えを言うのに自信がない。「子どもたちは、自分の考えはあるものの、授業中に発言するのは苦手、間違っているのではないかと不安に感じるといふ。子どもたちが感じている不安を自信に変え、互いに考えを高めていけるようにしたい」との教師の願いもあり、本校の研究主題を「自分の考えをもち、互いに学び合い高め合う児童の育成」伝え合う活動を通して」とした。

研究の軸は、子どもたちの表現意欲や思考力を高めるために伝え合う活動を重視した単元開発である。国語科は言語活動や伝え合う活動の基本となる学習である。平成二十二年からの二年間は、国語科を中心として児童の学力の育成に努めた。互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させることを意識して学習できる単元を考えた。その

中でも、発言の不安を少なくするために、聞き手を育てることを重要視した。そうすれば、自分の考えを伝えることも抵抗なくできるようになり、交流して考えを深めたり高めたりできるのではないかと考えた。そして今年度は、国語科で付けてきた力を他教科領域でも生かし、子どもたちの考えを深められるようにしてきている。

## 生活の中で

授業で行ってきた伝え合う活動の中で、友達の考えを受け止め、認めながら活動を進める様子を観察し、伝え合うときに大切な言葉を蓄積してきた。そして、言われるとうれしい言葉を教室に掲示した。その後も、子どもたちの様子や、自



▲言葉の蓄積

分が考えを伝えようとするときに言ってもらえるとうれしい言葉に着目して観察し、言葉の蓄積をした。

## 「話し合い10のやくそく」(右画像参照)は、

特別活動の研究会で教えていただいたことが、子どもたちの学習を支えるための大切な内容が多いので、特別活動のことだけに限らず取り組んでいる。日頃から、この約束を意識して学習したり生活したりするようにし、もちろん教師も約束を守るように心掛けた。

特に、「やくそく」の3は、伝えたいことをどうやって伝えたらよいか悩みながらも伝えようとする子どもには、心強いものである。聞いている友達は一生懸命理解しようとし、それがよく伝わらなくても、周りの友達が、「○○さんが言いたいのは、こういうことなのではないかと思えます。」と言い換えて伝えている。伝えようとした子どもも理解してもらってうれしいし、こういうことかなと自分のわかり方を伝えた子どももうれしそうである。一生懸命に話せば誰かがわかってくれるから、うまく伝えられなくても発言してみ

**話し合いのこころえ**

1. 友だちの話を最後までしっかりと聴きます。
2. 友だちの話をよく考えながら聴きます。
3. 自分も考えたことを言えます。
4. 友だちの話をよく考えながら聴きます。

**話し合い10のやくそく**

1. 友だちの話を最後までしっかりと聴きます。
2. 友だちの話をよく考えながら聴きます。
3. 自分も考えたことを言えます。
4. 友だちの話をよく考えながら聴きます。
5. 友だちの話をよく考えながら聴きます。
6. 友だちの話をよく考えながら聴きます。
7. 友だちの話をよく考えながら聴きます。
8. 友だちの話をよく考えながら聴きます。
9. 友だちの話をよく考えながら聴きます。
10. 友だちの話をよく考えながら聴きます。

ようとする様子が増えた。

## 授業の中で

伝え合う活動を行い、自分の考えを深めたり互いの考えを高めたりするには、学習の必然性が重要である。学習を計画する時には、必然性のある学習にすることを心掛けた。学習の最後に、エンディングアクティビティー（終末の活動）を位置付け、子どもたちのめあてを実現させるための自主的な活動を目指して学習を進められるように工夫した。そして、伝え合う活動を計画に位置付け、学びが深まるようにしている。

## これまでの実践例

### ○平成二十三年度 国語科

一年 「いいとこいっぱい！しょうへい小  
　　～新1年生に昌平小学校のよいところを伝えよう～」

三年 「食べ物がかせになろう」

六年 「ようこそ！干俣小学校のみなさん  
　　～町のよさを伝えるガイドブックを作ろう～」

### ○平成二十四年度

二年 生活科「めぎせ 野さい名人！」

三年 図工科「つないで つないで」

四年 体育科「走れ！つなげ！ヨネンジャー」

五年 国語科「6年生に聞いてもらおう！

～今の自分の意気込みを伝えよう～」

### ○実践事例 国語科

「生きていること」について考える。（6年）  
《本単元のめあて》

さまざまな文章を読み、「生きていること」についての考えをもち、意見文を書く。

#### 《学習活動》

教材「感情」生き物はつながりの中に」（光村図書）を学習し、「今、自分が生きていること」「生きるとは何か」について考えた。さらに、図書司書の先生にお願いして、「生きる」「命」を題材にしたお話を集め、自分の考えの参考となるように、読書も学習計画に加えた。

「伝え合う活動」を取り入れた授業では、二人組で交流を行った。相手が伝えた内容に質問をしたり、関係付けてもう一度考えを伝え直したりして、互いの考えを深く理解できるようにした。交流は、一度だけでなく相手を変えて数回行った。そうすることで、たくさん



さんの情報に触れるようにした。

交流を行った後の学習感想には、「友達の考えを聞いて、初めの考えと変わった。」「自分の考えに自信をもてた。」

「まとまってなくてもいいよ、と優しく言えたので友達がかん

ばって話してくれた。」「話し合っただけで楽しいと思っただけでよかった。」などがあがった。

友達と伝え合うことのよさや

楽しさを感じ、自分の考えに自信をもつことができるようになっていくことが感じ取れた。

#### 《どんな力が付いたか》

第一に、発言することに不安をかかえていた子どもたちも、友達と伝え合うことを楽しくと感じたり、もっと話したいと思えたりするようになってきた。言葉の蓄積についても幅が広がった。友達との交流の場では、積極的に気持ちがあたたかくなるような言葉を使うようになった。

そして、自分の考えを伝えるだけでなく、友達の考えを受け止め、大切にすることができた。特に、一人で考えるより、友達と伝え合いをして考えたほうが、より考えが深くなったり、新しい発見ができたりすると感じている。

今後、伝え合う活動で子どもたちの思考力・判断力・表現力を付けていけるように、多くの実践を積み重ねていこうと思う。



**「教師がそばについて教える」から  
「自分でやりきれる方法」を見つけたい！**

通級に入級しているBさんについて、担任の先生から、「そばについて教えるとはちゃんとできるのに、ついていないと途端に手遊びを始めます」と相談を受けたことがあります。最近のエピソードを尋ねると、コンパスと定規を使って三角形を書く場面で、先生が来るまで全く作業に取りかかれなかったそうです。Bさんは三角形を書きたくなくて遊んでいたのでしょうか。コンパスや定規をどう使うのか、どんな手順で作図をするのか、そんなことがBさんの中で、はっきりしていなかったのではないかと思います。

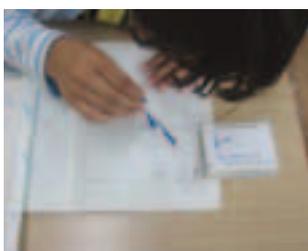
そこで、担任の先生と相談して、三角形の書き方を具体的に示した「手順カード」(図1)を作ってみました。先生が黒板に書くのを見せても、道具をどう使うのか、どんな順番で書くのかまでは黒板に残すことができません。

また、そばについて順番に教えてもらっても、また別の三角形を書くときに、手順が残っているわけでもありません。手順カードは、カードの手順に沿って作業を順番に進めると、確実に三角形を完成させる事ができます。Bさんは「定規で線を引く」などとカードに書かれている手順を嬉しそうに声に出して読んで、自分の力で書き終える事ができるようになりました。自分の力でやり遂げられる方法を持ったBさんは、三角形を書く作業を、「安心して正しく繰り返す」ことで、手順表がなくても書けるようになっていきました(写真3)。

私が出会ったLD(学習障害)の子どもたちの中には、「自分でやりきれる」「やり終えられる」という見通しが持てずに苦しんでいた子どもたちが多かったように思います。先生が来る



▲(図1)



▲▲(写真3)

まで待つのは、Bさんにとってもつらい時間だったと思います。子どもの見せる姿から、その子が自分でやりきれる方法を見つけていく作業も大事にしたいと思っています。

**子どもも先生もピンチに追い込まれない  
教室を目指して！**

これまでに数多くの支援教具を作ってきました。その中には失敗作もありましたし、すごく時間をかけて苦労して作った教材でも、1回しか使ってもらえなかったものもあります。「この教材があれば学びやすくなるかも?」「こんな手立てがあれば『できた! わかった!』を実感できるかも?」と、教材を活用している子どもたちの笑顔を思い浮かべながら、支援を考えることはとてもわくわくします。また、「なぜこれだとうまくいかなかったのかな?」と悩む中で、子どもたちがどこで困っているのか、新たな困難に気づかされることもあります。そこが教材作りの醍醐味のようにも思えます。

また、通級担当をしていると、子どもの指導はもちろんですが、いろいろな先生方とお話をする機会があります。担任の先生方は、本当に子どもたちの明日を考え、支援の方法を悩んで相談に来られます。そんなとき、子どもの困難と一緒に考え、その子にとって必要な支援教具の貸し出しなどもしています。

子どもたちが、「これがあったらできるよ、もっとやりたいな」と感じることは、たいへん大事なことです。そんな子どもたちの姿を目にすることは、子どもの一番そばにいる担任の先生にとっても、「この子とがんばっていけそうだな」と思い、次の支援を考えたり、広げていったりすることにつながるように思います。

私の作った支援教具が、子どもたちと担任の先生が「一緒にがんばっていける」一つの手立てとなることを願って、これからも子どもに寄り添った支援教具の作成を続けていきたいと思っています。

**筆者プロフィール**

小学校の普通学級担任、特別支援学級担任を経て、平成19年度からLD・AD/HD通級指導教室担当。特別支援教育士。著書『特別支援教育 はじめのいっぽ!』(学研)、連載『特別支援教育の実践情報』(明治図書、2010.5~2012.3)。神奈川LD協会などでセミナーの講師も務める。

**◆参考**

公益社団法人 神奈川学習障害教育研究協会(神奈川LD協会)  
<http://www.246.ne.jp/~kanald/index.html>

## 学ぶ機会を失わせないために ～子どもの困難に寄り添った支援教具の工夫～

読み書きや計算が苦手な子どもに出会ったとき、「この子は、何かで困っているかもしれない」という教師の意識は、特別支援教育の浸透とともに、学校現場にも広がってきたように思います。しかし、この意識を具体的な支援に結びつけようとする、なかなか効果的な手立てが見つからず、戸惑いながら授業を進めているのが現状なのではないでしょうか。

私も現場の教師として、目の前にいる子どもたちに、日々「自分にどんな応援ができるだろう？」と悩みながら過ごしています。今日は、そんな悩みの中から生まれた実践を、支援教具の紹介を通してみなさんにお伝えしたいと思います。

福岡県 飯塚市立飯塚小学校教諭 杉本 陽子

### 「みんなと同じ条件で学ばせる」よりも 「みんなと同じように学べる方法」を考えたい！

3年生になると、リコーダーの学習が始まります。新学期の教室からは、楽しそうなリコーダーの音が響いてきます。ほとんどの子どもたちは、新しい道具との出会いに胸を弾ませ練習にも力が入ります。そんな中、お友達と一緒に音を出すと、みんなとは違った音が出てしまうA君がいました。はじめのうちは、意欲的に練習に取り組んでいたA君も、少しずつ練習する姿が見られなくなり、やがてはリコーダーを持って来ることさえもなくなりました。A君の気持ちがリコーダーから遠ざかった原因を考えると、その一つに、穴をしっかりとふさぐことができないということがあります。リコーダーの穴は曲面になっているので、どの子もその曲面に合わせて穴をきれいにふさぐのは難しいように思います。不器用さのあるA君はなおさら大変だったのかもしれません。

そこで考えたのが、穴の周りを盛り上げて、範囲を確認したり、穴をふさいだ感覚が確かめられたりする補助具の作成です。

補助具の材料は、ホームセンターなどで売られているOA機器用のソフトクッションです(写真1)。このソフトクッションにリコーダーと同じ大きさの穴をあけ、穴の周りに貼り付けることで、穴の周りを盛り上げることができ



▲ (写真1)

ます(写真2)。

この補助具をA君のリコーダーに貼り付け、練習を開始しました。以前は、音を出すたびにちゃんと穴がふさげているか1回1回見て確かめ、それでも周りと同じ音が出しにくかったA君も、盛り上がった補助具を手がかりに触覚で確認しながら、音を出す練習に取り組めるようになりました。時間は少しかかりましたが、ふさぐ感覚が自分でわかるようになると、次のステップの運指の練習にも取り組めるようになり、やがて曲のリズムに合わせた演奏も友達と楽しめるようになりました。

みんなと同じ道具しか選択肢がなければ、困難のある子どもにとって、達成感を味わいにくく、意欲を失ってしまう学習につながる可能性があるように思います。これは、算数用具の定規や分度器なども同じことが言えると思います。左利きか右利きか、また、目盛り表示の大きさなどについても、子どもによって使いやすさは違うのではないのでしょうか。新しく学習する用具は、指導のしやすさもあって、学校で同じものを一括購入する考え方もありますが、同じ条件で学ぶよりも、みんなと同じように学べる方法を考えることも大切にしたいと思っています。



▲ (写真2)



# 愛媛県松山市

## 「ふるさと松山学」

### 歴史と文学の街・松山～郷土との絆を深める

正岡子規をはじめ、多くの文学者を育み、小説『坂の上の雲』の舞台ともなった松山市。2011年から12年をかけ、松山市教育委員会編『ふるさと松山学』が完成し、市内の小中学生すべてに配布されました。子規を中心とした、俳句と言葉に関する教材と、先人と文化についての読み物教材『語り継ぎたい ふるさと松山 百話』の2編、全9冊です。

「ふるさとに対する新しい発見や知識は、将来に向かって今を生きる希望や勇気を与えてくれる」。先生たち自らが編んだ教材は、ふるさとからの贈り物です。



絵もすべて先生たちの手による。「先人・文化編」表紙は、八木誠一指導主事作品。



松山市立石井小学校6年生のみなさん。覚えた俳句、好きな俳句など、付箋のいっぱいついた「松山学」テキスト。授業ですぐに取り出して使えるように、いつも子どもたちのそばに置かれている。俳句編は、『のぼさんと学ぶ俳句と言葉』（小学校低・中学年と高学年）、『子規と考える言葉・人・ふるさと』（中学校）の3冊。先人・文化編の6冊は、小学校低・中学年向けが『子規さんと仲間ぞな』『松山だんだん物語』『おいでんか松山』、高学年から中学生向けが『凜として立つ』『人の活 まちの粋』『嬉しきは故郷なり』。

#### 先生たちの声から生まれた教材

教材作成のきっかけは、市の教職員提案制度。現場の先生から「子どもたちにもふるさと文化をきちんと教えたい」という提案がなされたことです。愛媛大学などの協力を得て教育委員会が素案をまとめ、執筆者を募りました。「この人物についてぜひ書きたい！この分野なら任せて！」と手を挙げた書き手は、現職の先生たちなど、なんと99名。

松山の先生たちには、子規をはじめとした郷土の先人や、歴史などの知識が豊富な方が多いとのこと。山内泰教育長によると、「トツプダウンではなく、『こんな本で学びたい』という現場の思いからできたのがこの教材集。先生たちの熱意と知識が凝縮されているからこそ、制作意欲も高かったし、学校での活用度も高いんです。」

#### 郷土の文化を、より活用するために

松山市は、言葉を大事にする文化が根づいています。「俳句甲子園」「響け!!言霊」ことばのがっしょう「コンクール」などのイベントが多く開催される他、街のあちこちに句碑や文学碑があり、日常的に、豊かな言語文化に触れられる環境があります。また、小説『坂の上の雲』ゆかりの史跡を生かして、街全体を博物館に見立てる「フィールドミュージアム」構想による街づくりが行われるなど、街並みに豊かな歴史があふれています。

そんな環境を生かし、松山市では以前から、



▲正岡子規がわらじの紐を結んで、句作の旅に出ようとしている「旅たち」の像。子規の母校である番町小学校(当時の名称は勝山学校)に建てられている。後輩の子どもたちは、親しみを込めて「子規さん」「のぼさん」(子規の幼名・升<のぼる>から)と呼ぶ。



▲石井小学校の「今月の俳句」の取り組み。子規の句から選ばれた「今月の俳句」を三句、校長先生の前で暗誦できたら合格。昼休みには、校長室の前に行列ができる。「1年生も、日常の言語生活の中で、気軽に俳句のリズムを楽しんでいる。学年が上がり、教科書に俳句が登場すると、好きな句があることに目を輝かせる子どもも多いんです。」と、堀田優子校長先生。

◀石井小学校6年生の俳句(国語)の授業。「松山学」のテキストを活用して、子規の句を次々と暗誦。すべての句を覚えていた子どもも多く、競って手が挙がる。石井小学校では俳句の鑑賞にも力を入れており、子どもたちは、どの句が好きか、その句のどんなところが好きか、なぜ好きか、など、自分の言葉で生き生きと語る。

総合的な学習の時間、国語科、社会科等、さまざまな教科で、俳句や子規の生活などを扱う機会がありました。そうした活動をいっそう深めるため、また、どの学校でも市の特性を生かした学習が行えるよう、「松山学」教材が活躍しています。

### 楽しんでほしいことを願う

「松山学」教材作成にあたって最も議論がなされたのは、「発達段階に応じてどう作品を提示するか、どうすれば子どもが自ら手に取るような内容になるか」だと、指導主事の渡部和寛先生。

「俳句」編については、低学年は、子どもが日常で使う平易な言葉で詠まれ、情景をイメージしやすいものを子規の俳句から選句。中・高学年や中学校は、子規の生涯の足跡や業績を紹介するとともに、作品を通して、ふるさとや人、言葉について考えられるようにまとめています。低学年から順を追って、子規と深い友情で結ばれていた夏目漱石との親交についても紹介しているため、小学校高学年・中学校国語での、近代文学の学習にも、スムーズにつながります。「先人・文化」編では、各学校から紹介された地域に伝わる先人の魅力的なエピソードも掲載し、10ページ程度、朝読書2回分ほどで読みされる短編集としています。

郷土を知ることを楽しみ、先人から受け継いだ誇りある松山の文化を糧にたくましく成長してほしい——「松山学」の本には、先生たちのそんな願いが詰まっています。

## 愛知

### 学校のことがよく分かる ホームページ

小牧市立小牧中学校校長  
玉置 崇

小牧中学校ホームページ（HP）は、平成24年4月、私の赴任と同時に、リニューアルいたしました。教育行政職中は、日々、学校への苦情を聞いていました。そのうち、学校の取り組みが伝わっていないことによる誤解が半数にのぼりました。このことから、HPによる情報発信の重要性を痛感したのです。

小牧中のHPは、項目立てに特徴があります。「4月早々の学力テストの理由」「教科書が厚くなった理由」など、教育活動そのものについて分かりやすく説明をした、「よく分かる教育活動」という項目があります。

「学び合う学び」という項目もあります。小牧市では、すべての小中学校が「学び合う学び」を基軸にした授業づくりをしています。ところが、「学び合う学び」とはどのような授業なのかが、保護者にはうまく伝わりません。そこで、日々、象徴的なシーンを撮影し、その写真とともに、一言解説を添えてアップしています。

また、「A B C Dの原則」という項目も特徴的です。生徒には「A=当たり前のこと、B=バカにしないで、C=ちゃんとやれる人こそ、D=できる人」と言っています。このことを常日頃意識してほしいと願っての項目です。他人の善い姿を見て学んでほしいという願いもこめて、生徒の姿をアップしています。

現在、一番注目を浴びているのは、「PTAの部屋」です。更新等は、すべてPTAにお任せしています。内容チェックなど、学校は一切関知していません。学校の思いをよくつかんでいただき、応援していただける記事が保護者の立場で書き込まれています。

こうしたHPが継続できる秘訣には、校内ネットワーク上に「デジタルカメラ記録」というフォルダを用意し、様々な活動写真を保存し、だれもが自由にその写真を活用して、HP記事に使うことができる点があります。

毎日更新を基本としています。ぜひ、我が校HPを訪問していただくと幸いです。



## 福岡

### 「周年記念」の会は 子どものために

東北福祉大学特任教授 教材・授業開発研究所代表  
有田 和正

各地の学校で、「〇〇周年記念」という催しが行われている。寄付を募って、年表的な記念誌をつくり、祝賀会を行ったり、卒業生が集まって講演会を聞いたりするにとどまるものが多く、在籍する子どもが直接に関係する行事は少ないようだ。

このようなあり方を見直し、「周年記念」というのは、誰のためにあるのか、何のためにあるのかと根本に立ち返って考えたのが、福岡県飯塚市立椋本小学校の木村宏之校長である。

椋本小学校は、平成23年度、100周年を迎えた。「学校は子どもを育てるためにあるのだから、子どものためになるものであるべきだ」。一番よい方法を考えた末、「授業のできる講師を呼んで普段できないような授業をやってもらおう」という結論を出し、私に電話があったのだ。木村校長の考えを聞いて、「すばらしい考え方です。先生の期待に応える授業をさせていただきます」と答えた。

授業は2月末、学年は6年生ということで、「小学校最後の社会科授業——戦後67年」ということにした。日本は戦前、多くの戦争をしてきたのに、戦後67年間一度も戦争をしていない。その根本は、日本国憲法である。この平和憲法を守るのは、今の子どもたちに課せられた課題であると私は考えている。「日本国民としての誇りを持って、よりよい国づくりに努めてもらいたい」という願いを込めて授業をした。

子どもたちは、第2次世界大戦後、67年間一度も戦争していない国は、わずか6カ国であること、この間に世界では300回以上の戦争が行われていることを調べ出した。そして、6カ国の中に日本が入っていることを発見し、「どうして平和が守れたのか。それは日本国憲法があるからだ」と考えつき、子どもたちは、にっこりした。

子どもがこのように取り組み、それが記憶に残ることが、「周年記念の会」を行うねらいではないかと考えている。



## 北海道

### 子ども一人一人の「いのち」を輝かせるために

函館市立鍛神小学校校長  
三島 千春

**鍛** 神小学校は、卒業生1万人を超える、創立131年の伝統校です。

子どもたちは、教育目標「かながえる子」「やさしい子」「げんきな子」の頭文字「かやげの子」を合言葉に、日々の学校生活を送っています。

教育活動の重点の一つとして取り組んでいる「いのちの教育」は、全教育活動を通じ、自然・友達・社会とのかかわりの中で、命を育み、命に学び、命にふれ合い、命を守る子どもたちを育てています。

「いのちを育む活動」では、全校児童が学校花壇に一人一苗を植え、大切に育てています。学級ごとに当番を決めて、学級の花壇、自分の花という意識をもちながら、水やりや雑草抜きを行っています。同じ命をもつ生き物としてのかかわる姿がそこにあります。

「いのちを学ぶ活動」では、生死を見つめる体験活動として、鮭の孵化場を見学しています。親鮭の“死”と、鮭の卵の“生”が同じ空間の中に存在する現実を目の当たりにして、子どもたちは命の尊さを学び取りました。また、産婦人科医を特別講師に、生命誕生の学習を行っています。自分は奇跡的な確立の上に生まれてきたことに驚くとともに、受け継がれる命の尊さについて深く学びました。

「いのちにふれ合う学習」では、高学年が近隣の幼稚園児との交流を行っています。幼い命とふれ合う中で、自分の役割を考えながら、人の役に立つ喜びを味わい、他者とのかかわりを学ぶことができました。

「いのちを守る学習」では、休み時間の災害を想定し、自らの判断で避難する訓練を毎月1回行っています。自他の命を守り抜くための正しい判断力が育ってきました。

今後も、子どもたちが自らの命を輝かせられるよう、「いのちの教育」の推進に力を入れていきます。



## 埼玉

### 子ども自転車運転免許制度

～自転車の安全な乗り方を身に付けよう！

さいたま市教育委員会

**さ** いたま市立小学校の児童が関係する交通事故のうち、半数以上は、自転車運転中に起きています（平成23年度）。さいたま市教育委員会では、自転車を利用する小学生の交通事故を防ぐために、平成24年2月27日に、埼玉県警察本部と連携し、「子ども自転車運転免許制度」推進宣言を行いました。この制度により、自転車を利用する小学生が、自転車の安全な乗り方を身に付け、交通安全に対する意識を高めることができるものと考えています。

この「子ども自転車運転免許制度」は、平成24年度内に78の小学校で実施し、平成25年度末までに、市内103の全小学校で実施します。「子ども自転車運転免許制度」における免許証の交付は、安全講習を受講後、学科試験と実技試験に合格することが条件となっています。

安全講習は、自転車に安全に乗るためのルールやマナーについて、DVDやテキストを利用して行います。

学科試験は、基本的な内容について、○×選択形式で10問出題します。

実技試験は、自転車を使って実習形式で行います。「自転車の安全点検」「信号のある交差点での二段階右折」「指定場所における一時停止」「自転車の歩道通行」「障害物脇の通過」が実習できるコースを設け、市内警察署、交通安全協会、市交通指導員、交通安全保護者の会、各区の関係課、保護者や地域の方々などに御指導、御協力をいただいています。

学科試験及び実技試験に合格した児童には、各警察署とさいたま市教育委員会の連名で、「子ども自転車運転免許証」を交付します。

今後も、埼玉県警察本部と連携し、交通安全協会をはじめとする関係諸団体などの御協力をいただきながら、交通事故防止の徹底に努めてまいります。





# 地球となかよし ゼミナール

子どもたちの  
メッセージに学ぶ

毎年、夏に募集している、教育出版「地球となかよしメッセージ」。

各学校のすばらしい取り組みも、子どもたちの作品に表現されています。今回は、東京都・根岸小学校から寄せられた作品を紹介します。



「STOP! 森林伐採!」  
荒井 友梨 6年

本を読んでいたら、「熱帯雨林が、減っている。」という事が書いてありました。熱帯雨林が減ってしまうと、ゴリラやトラたちが絶滅してしまい、生態系がくずれてしまいます。さらに、熱帯雨林以外の森林もふくめると、一年に東京都の約25倍の広さの、約520万ヘクタールの森林が減っているそうです。たくさんの森林が減ってしまうと、ゴリラやトラ以外の動物たちも絶滅してしまうかもしれません。

森林は、おいしい水や、きれいな空気をつくっているのに、人間は、お金をかせぐ事だけを考えて大切な森林を伐採しているのです。これ以上、大切な森林が減らないように、という願いをこめて、このポスターを書きました。



「わたしのすきな秋のせいざ」 菅原 由子 2年

わたしはほしが大きいです。でも、東京ではあまりほしが見えません。七月におきなわに行きました。くらい空にほしがたくさんあってキラキラかがやいていました。東京にかえるとやっぱりほしは見えません。どうしたらほしは見えるのかなと、かんがえました。空気をきれいにすれば、ほしは見えると思いました。なぜなら、おきなわの空気のほうがきれいだと思うからです。東京も、おきなわのように空気をきれいにすれば、ほしが見えるようになります。そうしたら地きゅうもきれいなほしになると思います。ごみをおとさず、そうじをする。このようなことをすれば地きゅうもよるこんでくれると思います。

## 豊かな心を育む道徳教育の充実

東京都台東区立根岸小学校校長 高橋 武郎

台東区立根岸小学校は、バ  
ンダのいる上野動物園や桜の  
花見で有名な上野公園の近く  
にあり、来年には創立140  
周年を迎える、歴史と伝統の  
ある学校です。また、人や自  
然などのかかわりの中で自  
立して生きていく力を高める  
ため、豊かな心を育む道徳教  
育にも力を入れています。

さて、夜空に輝く星座を見  
ることが大好きな菅原由子さ  
んは、沖繩で見た美しい星空  
が強く心に残り、星座の本か  
らイメージした星の世界を描  
きました。アンドロメダ姫に  
襲いかかろうとする凶暴で巨  
大なクジラ座のクジラに、見  
るものを石に変えてしまう怪  
物のメドゥーサが、剣と盾を  
持って応戦しているところで  
す。

このように、東京でも空気  
がきれいになれば、夜空にい  
ろいろなイメージを広げるこ  
とができます。また、ごみを  
なくしてきれいな地球にすれ  
ば、地球も遠くから見たとき  
にきれいな星になるとい  
素直で感性豊かな思いを伝え  
ている作品でもあります。

また、荒井友梨さんは、日  
頃から社会の出来事に関心を  
もち、小中学生向けのニュー  
ズ解説雑誌をよく読んでいま  
す。その中で、熱帯雨林の破  
壊という環境問題に目を止  
め、人間の勝手な考え方で熱  
帯雨林を破壊することは、絶  
対にやめさせなければならな  
いと考えたのです。

さらに、動物も大好きな荒  
井さんは、動物が生活するた  
めに不可欠な森林を大切にす  
る必要があることを踏まえ  
て、ゴリラやトラなどの動物  
を絶滅させてはならないとの  
強い思いから、森林伐採を止  
めてほしいと願い、この作品  
を描きました。おいしい水や

きれいな空気をつくり出して  
いる森林を破壊することは、  
生態系を破壊するという点か  
ら大きな問題だと鋭く見抜  
き、これを指摘したところに、  
感性の豊かさが感じられる作  
品です。

この二人のように、美しい  
自然を大切にすることを育て  
る素直でやさしい心を育むこ  
とは、とても重要なことだと  
考えています。また、その自  
然を脅かす環境破壊などの問  
題性を、科学的な根拠も踏ま  
えながら敏感に感じ取る鋭い  
感性を育てることも、とても  
大切なことだと考えていま  
す。

そのような意味からも、本  
校で取り組んでいる「豊かな  
心を育む道徳教育」を、今後  
もさらに継続していきたいと  
考えております。



## 「いまここにいること」を受けとめて



香山 リカ  
(精神科医・立教大学教授)

長かった夏休みも終わり、いよいよ学校が始まった。久しぶりに友だちに会うのも楽しいし、勉強するのも新鮮。あまり好きじゃなかった給食さえ、おいしく感じる。いやあ、やっぱり学校っていいなあ…。

こんな子どもたちばかりなら教員も保護者もラクだが、実際にはなかなかそうはいかないだろう。昼夜逆転生活になれた子どももいれば、塾の夏期講習などですっかり疲れきっている子どももいる。友だちには学校以外でも会えるし、メールなどでやり取りしている子も多いだろうから、学校で顔を見てもあまり感動しないかもしれない。そのまま休み明けの日々が続き、なんとなく力が入らない……。

では、そういった子どもたちをなんとか“学校モード”に戻すためには、どうすればいいのだろう。

まず大切なのは、それぞれの子どもの夏休みの過ごし方を、十分に評価してあげることではないか。楽しい夏休み、充実の夏休みもあれば、がっかりの夏休み、ダラダラの夏休みだった子どもい



る。そういった話をよく聞いて、いずれにしても「元気にまた学校に通えてよかったね」と“いまここにいること”を手放しで喜んであげること。

そうやって休み期間の自分をきちんと認めてもらえることができ、はじめて子どもは「よし、秋からの学校生活もしっかりすごそう」と新しい生活をスタートさせる気になれるのではないだろうか。

教員にしても同じだ。思い通りの夏休み期間だった人も、やらなければならないことを片付けられず、ちょっとあせった気持ちで新学期を迎える人もいるはずだが、いずれにしても夏休みを乗り越え、“いまここにいること”は肯定したい。そして、秋や冬に向けてあまりにもたくさんの目標、やるべき業務を詰め込みすぎず、心とからだをしっかりと整えながら自分のペースで再スタートを切ってほしい。そう思うのだ。

からだだけではなく、心だって夏バテをする。この夏の暑さでエネルギーを消費しているのは、子どももおとなも同じ。「ゆっくりやろうよ」を合い言葉にしてほしい。☘

第10回  
記念大会

# 地球となかよしメッセージ

作品発表のお知らせ

「地球となかよし」という言葉から感じたり、考えたりしたことを、写真やイラストにメッセージをつけて表現する「地球となかよしメッセージ」。今年度も、素晴らしい作品が集まりました。

「第10回 記念大会 地球となかよしメッセージ」入賞作品は『Educo』2013年冬号(2013年1月下旬発行予定)で発表します！  
昨年度の入賞作品は、教育出版ホームページでごらんいただけます。



(「Educo」バックナンバー、「第9回地球となかよしメッセージ作品集」についてはお問い合わせください。)

NPO法人フローレンス代表理事

## 駒崎 弘樹 さん

### 社会起業——社会問題を解決したい

病児保育を行う「フローレンス」立ち上げのきっかけは、子どもの病気で会社を少し長く休んだら、クビになってしまった親御さんの話を聞いたことです。子どもの預け先がないがゆえに仕事をあきらめざるをえない。当時、僕は未婚で子どももいなかったんですが、こんな不条理が平成のこの世にあつていいのかと。こういう社会のあり方は、絶対に変えなければならぬ。事業を通して社会問題を解決したいという思い、ある種の怒りが、「社会起業」につながったんです。

そして、フローレンスでは、長時間労働が当たり前の現状について、「働き方を変える」ことも提唱し、業務を効率化するノウハウを提供しています。父親も母親も、家族や社会にかかわる時間を確保する。これは、会社人でなく社会人、市民として、いかに主体的にふるまうかということにつながります。

学校現場においても、先生たちの事務作業量の膨大さが、長時間労働につながっている面があると聞きます。子どもに向き合うということについては効率を度外視するべきですが、事務作業や会議の効率化、圧縮という点では、改善の余地がかなりあるのではないのでしょうか。すべてを個々の先生が一からやるのではなく、何に個性を発揮して、何を共有化できるか等、メ

リハリをつける。それにより、本来の業務である、子どもたちとかわる時間や研究する時間を確保できるようにすることが、子どもにも、先生にとっても、大切なことだと思えます。

### 気づいた個人が、社会を変えていく

「市民としてのふるまい」と言いましたが、現在の社会は、どうも「叩くフェーズ」になっているようです。行政のやることはとりあえず悪い、何もしてくれない、と叩く声が大きくなり、官と民の相互不信が生じている感があります。でも、叩くだけではクリエイティブな解決策は生み出せない。町や教育をよくするために自分たちもかわらう、だから政治や行政も同じテーブルについて話し合おう、という姿勢が重要でしょう。糾弾型の「してくれ、してもらおう」ではなく、「どうしていいこうか、一緒に何がで



きるか」ということです。フローレンスの立ち上げともつながりますが、行政頼み、批判ではなく、気づいた個人が社会を変えていくこと。悪者探し、鬱憤晴らしはもうやめよう、まず、冷静に話を聞き、客観的にデータをみてみよう。そのうえで、それは修正の余地がある、この方向で行くほうがよい、といった、市民的に成熟したコミュニケーションや政策的対話ができれば、日本はまだまだ、可能性にあふれているのではないかと思います。今、こういった対話の場をどう形成していくか、ロールモデルをどうつくるか、考えているところです。

### 就学前と就学後の連携を

保育の現場からみて気になるのは、保育でなされていることと、その先に子どもたちが上がる、学校でなされていることを、もっと接続できないかということ。就学前教育と、就学後教育の対話が不十分な現状があります。

幼保小中連携の取り組みも各地で始まっているようで、これをもっと膨らませていきたい。僕自身も、学校サイドとのコミュニケーションをもっとりたいと思っています。就学前教育における子どもたちへの気づきなどをきちんと学校に伝え、子どもたちの環境が変わっても一貫した対応ができる方向を考えたいですね。学校に上がる前から教育がスタートしている、という意識を、共有していくことが重要だと考えています。

NPO法人フローレンス <http://www.florence.or.jp/>  
 こまざき ひろき 1979年生まれ。慶應義塾大学総合政策学部卒業。在学中に学生ITベンチャー経営者となる。大学卒業後、フローレンスをスタートし、日本初の「共済型・非施設型」の病児保育サービスを行う。内閣府「新しい公共」専門調査会推進委員、東京都男女平等参画審議会委員、慶應義塾大学非常勤講師などを務める。著書に「働き方革命(ちくま新書)」「社会を変える」を仕事にする(ちくま文庫)など。一児の父。

## Educo Salon

前号について寄せられたご感想です。

◆「北から南から」静岡市立安東小学校。「授業は教師の命」、まさにそのとおりです。学校が行う教育活動の本質は、授業です。それを支えるのは、授業研究と教材研究です。最近の学校は忙しく、授業研究が後手に回っているのではないかと心配しておりましたが、真摯に授業を見つめる学校の姿に安心しました。(埼玉県 松田温昭) ◆「きょういく見聞録」の「震災がきっかけの子どもの貧困問題」。「この震災の本質は、元からの困窮者を『取り残された被災者』という形であぶりだしている」という指摘、目からうろこです。NPO法人アスイクの活動に敬意を表したい。(北海道 齊藤英昭) ◆「地球となかよしレピックス」、長崎県の平戸オランダ商館の活用はすばらしい。自分たちの住む町「平戸」の歴史や諸外国との交流を学び、国際交流の芽を大切に育んでいる。大いに参考にしたい実践である。(山形県 佐藤敬彦)

## なかよし宣言

わたしたちをとりまく自然や社会は、科学技術の進展や国際化、情報化、高齢化などによって、今、大きく変わろうとしています。このような社会の変化の中で、人間や地球上のあらゆる命がのびのびと生きていくためには、人や自然を大切にしながら、共に生きていこうとする優しく大きな心をもつことが求められています。

わたしたちは、この理念を「地球となかよし」というコンセプトワードに込め、社会のさまざまな場面で人間の成長に貢献していきます。